

『太平記抜書』の類（写本）書誌解題稿（下）

* 長 坂 成 行

要 旨

中世末期から近世にかけての読者にとっても、『太平記』の長編性は通読の障路となっていたようである。その一方、享受者の本作品への関心は強く、ために多くのダイジェスト版が案出された。粗筋・異文・人物・地名・語句・和歌などさまざまな関心からの多様な抜書が写本として存在する。小稿はそれら『太平記抜書』の類の総覧と書誌解題を行うものである。

はじめに

『太平記』のような長編の作品は、本文すべてを通読するのが困難なため、さまざまな種類の抄出本が作成され、その概要については加美 宏氏『太平記享受史論考』（一九八五・五、桜楓社）などに詳しい。小稿は写本として伝わる多様な『太平記抜書』の類の総覧を試みるものであり、予定している「伝存『太平記』写本総覧」の稿稿の一部でもある。以下、『太平記抜書』の類を私に分類して、つぎのよう

な順序で掲載する。なお『太平記総巻』の中には『太平記抜書』としての性格を持つ本もあるが、ここでは扱わず『写本総覧』で触れることにする。

〔全巻の粗筋を要約した抜書〕

〔鳥津家本異文の抜書〕

〔参考『太平記』に関わる抜書〕

〔特定の地域・人物に関わる抜書〕

〔人名・地名等を総覧する抜書〕

* (一)こまで (上)は『奈良大学紀要』第三六号に掲載、以下が本稿

〔語句に関する抜書〕

〔和歌などの抜書〕

〔部分的な抜書・抄出〕

〔古筆切〕

〔その他〕

各本について、おおむね以下の事項に言及する。

番号 所蔵機関(書名、通称または仮称)(必要あれば旧蔵者名)

(整理番号)、「国文学研究資料館にフィルム・紙焼写真がある場合はその請求番号」、巻冊数。以下、書誌事項(装丁について、楨紙袋綴の場合は特記せず)、奥書・識語(私に読点を付す。／は改行、)は改丁を示す)、印記など。奥書・識語なき場合の書写年代は依拠目録などによる。内容上の特色については、先行論文などがある場合は簡略に記すが、従来何らの言及がされていない抜書についてはやや詳しく述べる場合もある。

〔目録〕当該本の所在情報を載せる目録を示す。

〔翻刻〕翻刻を掲載する資料を示す。

〔参考〕当該本に関する参考文献を挙げる。雑誌等論文が単行本に再収された場合、原則として後者で示す。(頻出する以下の文献は「」内の略称で示す)

・高橋貞一「太平記諸本の研究」(一九八〇・四、思文閣出版)。

〔高橋〕

・加美 宏「太平記享受史論考」(一九八五・五、桜楓社)。

美

・小秋元 段「国文学研究資料館蔵「太平記」および関連書マイクロ資料書誌解題稿」(国文学研究資料館調査収集事業部「調査研究報告」二六号、二〇〇六・三)。

↓【小秋元】

〔備考〕その他の注記事項。

〔題句に関する抜書〕

29天理大学附属天理図書館蔵(太平記聞書)

(整理番号 二二〇・四、イ五七)

写本一冊。後補雲母草花模様表紙(二二・五×一七・〇釐)、中央後補題簽「太平記聞書 全」。楨紙袋綴、四穴。一面九行、漢字片仮名交、付訓片仮名。墨付六四丁。内題「太平記第一聞書」。印記、巻首上に「寶玲文庫」(長方形単郭朱文)、中に「天理圖／書館蔵」(長方形単郭朱文)、下に「斑山／文庫」(方形単郭朱文)。巻尾下に「月明荘」(長方形単郭朱文)。

裏見返しに識語「昭和三年七月購求シテ架ニ藏ス／斑山文庫主人」。表紙見返しに貼紙、

「此ノ書一巻太平記四十巻ノ難語ヲ註セリ、其ノ語ニヨリテ判ズルニ／流布本トハイタク異ルカ如ク、コレニヨリテ太平記ノ古體ヲ視フ一ノ階梯トモナスベシ、作者明カナラズ、サレド室町末期ノ筆寫タルハ明カノ也、第十二ニ宗祇ノ夢想遠里小野云々トアレバ明應文龜ヨリハ後ノ大永永正ノ頃ニ成レリトモナスベキカ、書體ハ当時ノモノトシテ／認メ得ラル、カ如シ、註言簡約ニシテ古拙處々失笑ヲ禁ジガノタキモノアリ、但第廿三ニ「眞性覺一座頭ノ源也」トアルハ、流布本ノ第廿二ニ「眞都ト覺一檢校ト二人ツレ平家ヲ歌ヒケル」ト／アルソレライヘリ、眞都トアラズ眞性トアルコト、注意スルニ足ル、此ノ類ナホ他ニ少シトセズ、編次

ニモマタ一二巻ゾツノ先後アリ／テ、此ノ書ノ巻四十八流布本ノ三十九四十二當レリ／斑山識」
とあり。

本書は丁類本を底本にした語句注釈書で、披見困難や欠巻などの多い同系統本の様相をある程度知り得る重要な手懸りになる。

なお、表紙見返しに三分分、以下の九語の注あり。巻一の内か、青木氏翻刻になし。

「奸佞カシキネタマシキ忠ナキ臣事也・光彩サイキラノ事／トキノイセイノ事也・記効キコウハ後ノ世仕ニ／ナスヘキトノシルシノ事也・南家ハフチハラウノナリ・儒業ハ文道ノ事也／・炎焦エンセウアツキ事・一封ホウハ状ノ事也・无為仙人ナトノ事也・貶ヘンラルハ人ヲラトシムル事也」。

〔目録〕「天理図書館稀書目録 和漢書之部 第三」（一九六〇・一〇）一四七頁下。

〔翻刻〕青木 晃「『太平記聞書』」（『ビブリア』五九号、一九七五・三）。

〔参考〕

・亀田純一郎「『太平記』」（『岩波講座日本文学』、一九三二・七、岩波書店）。

・高野辰之「『古文学踏査』」（一九三四・七、大岡山書店）。

30 宮内庁書陵部蔵（御願書并御告文旧草のうち、太平記同）
（整理番号 伏・三〇四）【国フ20-546-15】

原本未見、以下は紙焼写真およびそれに付された覚書による。
肌色表紙（一四・〇×二〇・〇）の表紙左に「御願書并御告文旧草」と打付書。遊紙一枚の後の扉中央に「御願文（右ニ「書」ト傍書）并御告文／旧草／奥太平記詞小有之」、左上に「値シユツ／憂ウレウ／ハコクム」とあり。二才に内題「八幡社御願文」とあり以下三四ウまで願文・告文集。一丁遊紙あり、三六才から四四ウまで「太平記」巻一〜六の用語（六八項）を列挙する。四五才から四六才まで大般若經に關わる願文三点あり。

「太平記詞」の部分、各項の冒頭に合点を付す。漢字片仮名交、訓は片仮名。一面一〇〜一四行とまちまち。巻二の最後「些オトシヤト真寐マドミ寝」の如く特殊な用字の訓を記したものの、依拠本文は天正本系統と認定できる。本抜書が原本の用字に忠実であるならば漢字平仮名交の写本に拠ることになるが、天正本系統でそうした本は未確認。

〔目録〕「和漢圖書分類目録 増加二」（一九六八・三、宮内庁書陵部）一五〇頁上。

〔翻刻〕

・長坂成行「宮内庁／書陵部蔵『御願書并御告文旧草』中『太平記詞』」。
翻刻「『青須我波良』三四号、一九七八・一二）。

31 国文学研究資料館・史料館蔵（太平記等諸書抜書）
（整理番号 三二六F・一四〇七）
平松家文書の内。仮綴写本四丁のみ。

大きき二一・五×一五・五種、表紙なく「諸書」と墨書。一丁目は「明衡消息抜」で語句抄出、二丁目「太平記抜」で巻二五・三一・三二・三四・三五・三七・四〇から二九語句とその読みを掲出。例えば「佐羅科」^{サロコ}「夥敷」^{ワビシク}など。「太平記音義」「太平記聞書」とも異なるが読みのための抜書か。三丁目は「尺素消息抜」。

〔目録〕「史料館所蔵史料目録」三一集（一九八〇・三）のうち「平松家文書目録 文芸・諸芸」一四〇頁上。

〔和歌などの抜書〕

32九州大学附属図書館萩野文庫蔵（太平記歌寄）

（整理番号 萩野文庫・タ・五）

写本一冊。紺色布地装の帙に収納。

水色表紙（二三・〇×一五・五種）左肩に「太平記歌寄」、その下方に「全」と打付書。一オ目録題「太平記歌寄目録」とし、一オから二オまで「○南都北嶺行幸事」以下「○中殿御會事」まで六二項の章段名を記す（一面一六行二段書、○は朱色、巻数は記さず）。改丁して内題「太平記歌寄」とし、章段名（朱丸を付して二字下げ、本文を引用し（一部省略）その後には和歌を朱丸付き二字上げて表記する。漢字平仮名交、一面一六行、字面高さ約一七・〇種（和歌の箇所、一八・三種）。遊紙一枚、墨付五八丁。江戸後期の写しか。

冒頭を例示する。

（二字下げ）○南都北嶺行幸事／

元徳二年庚午二月四日行事の弁別当万里小路中納言藤房卿を召されて、来月八日東大寺興福寺行幸有へし、早供奉の輩に觸仰すへしと仰出されければ、藤房古きを尋例を考て供奉の行粧路次の行列を定らる、中書、されは満山歌て年を経る処に忽に修造の大功を遂られ速に供奉の儀式を調へ給ひしかは、一山眉を開き九院首を傾けり、御導師は妙法院尊澄法親王、呪願は時の座主大塔宮尊雲法親王にてそ御座しける、称揚讚佛の砌には鸞峯の花薫を譲り、歌唄頌徳の所には魚山の嵐響を添、伶倫遇雲の曲を奏し、舞童回雪の袖を翻せは、百獸も率舞、鳳鳥も來儀する斗也、住吉の神主津守の國夏太鼓の役にて登山したりけるか、宿坊の柱に一首の歌をそ書付たる、／（二字上げ）○契あれば此山もみつ阿耨多羅三藐三菩提の種や植けん 津守國夏／是は傳教大師当山草創の古へ、我立袖に冥加あらせ給へと三藐三菩提の佛達に折給ひし故事を思ひて讀る歌なるへし、（大系五九頁相当）人名に傍線を付すのはこの項だけで、以下の項にはなし。「太平記」の巻数は示していない。末尾に「歌敷／本歌狂歌合計百十首別連歌壹首」とある。頌・漢詩の類も載せるが数には入れていない。

印記、一オ右上に「九州帝／國大學／圖書印」（方型単郭朱文）、右下に「斎藤／文庫」（縦長楕円型双郭朱文）、三オ下に「醉齋□／民琢藏」（長方形単郭朱文）。一オ上に青色丸スタンプあり「昭々・の・書」の受入日付を印す。萩野文庫は明治・大正の修史家で東京帝国大学文

科大学教授・萩野由之（一八六〇～一九二四）の旧蔵書を収める。「斎藤／文庫」は斎藤雀志の印、「近代蔵書印譜初編」（一九八四・一二、青葉堂書店）によれば「名銀蔵。明治四十一年（一九〇八）十二月二十三日歿、年五十八、三井呉服店番頭。雪中庵を継ぎ、俳名雀志を名のる。種彦手沢の俳書を中心とした歌派の収書多く、大概大野洒竹の手に落ち、その後は散佚」という。「醉齋□／民珠蔵」の印主未勘。

本書は和歌を中心とした抜書で、「本歌狂哥合計百十首」（巻尾識語）を載せるが、その前後の詞章もかなり長く、たとえば「一宮御息所事」では四丁ほど引用しており、和歌だけではなく筋書きへの興味にもよるものであろう。ただ、その依拠本文はやや特徴的である。天正本の類の巻一一末尾にある工藤左衛門入道の通世と詠歌二首を載せ、また梵舞本巻一二尾題の後に付記される「神明之御事」があり「おもひかね三角柏にうらとへは」の歌を引く。巻二三藤房通世の条では父宣房が岩蔵にいた藤房に出家再考を促した所、「何事の浦山しさに帰るへき世にあるとも厭こそせめ」の歌を記す（歌は天正本にあるが、地の文の詞章は天正本と異なる。新編九八頁相当）。流布本巻二三「土岐頼遠狼藉事」では「いしかりしときは夢窓にくらはれて」の落首を載せ多くの諸本に同じ（天正本になし）。巻二六「田楽棧敷事」では「去年は軍今年は棧敷打死の処は同じ四条なりけり」があり、南都本・毛利家本・天正本に同じ。巻三二「八幡御託宣事」の末尾の三首の落首」あり（天正本・毛利家本等になし）。巻三五「北野通夜物

語事」では日野僧正頼意の名あり、時頼回国記事あり、流布本に同じ。以上の特徴をすべて備えるのは慶長一五年古活字本で、本抜書は同書に依拠するとみてよいだろう。

〔目録〕

・九州大学附属図書館蔵「萩野蔵書目録」（年紀なし、〇二九・九、H一三）に「一〇四 太平記歌寄 壹冊 金二元」（五右）。「萩野文庫目録」（昭和七年、謄写版）がある由だが未見。

〔備考〕

萩野由之については嵐 義人「萩野由之」（『皇典講究所 草創期の人びと』、一九八二・一一、國學院大學）など。

33 愛媛大学附属図書館堀内文庫蔵（太平記歌抄）

（整理番号 堀内文庫五九）

写本一冊。

表紙なく本文料紙に同じ、大きさ二八・〇×二〇・五種、中央に打付書「太平記歌抄」。右肩を紙縫りで仮綴（右下にも穴跡あり）。目録なし、内題「太平記歌抄」。「太平記」の詞章を書き（四字下げ）、その後には和歌を記す。漢字平仮名交（一部片仮名交）、一面二一行、字面高さ約二二・五種。墨付一六丁。奥書・識語・印記なし。

冒頭の三首「我国に梅の花とは見すれともおほ官人は何とみつらむ／奈良法師粟子山までしふり来ていか物のくをむきそとらる、／比叡法師あはの上座にはかられて緊く獄につかれける哉」（詞章は省略）は

「太平記」剣巻に載るもの。第四首目「契アレハ此山モみつ阿耨多羅・・」以下、九九首目「さき匂ふ雲井の花の本つ枝にも、代の春を猶や契らむ」までは「太平記」の中の歌（漢詩・頌もあり）である。

体裁の例として第五首目を示す。

〔三字下げ〕二條中将為明卿六波羅召捕て噉問せんとシケル時硯ヲ乞テ／思きや我しき嶋のみちならてうき世のことを問るへしとは／〔二字下げ〕此哥にて罪なきよしになりぬ

本書は流布本から和歌等を抄出したもの。堀内家の文芸活動は、堀内長郷（明和四年～天保一四年）・昌郷・匡平の三代に特徴があるといわれ、そのいづれかの研鑽の痕跡であろう。

〔目録〕

「愛媛大学附属図書館寄託『堀内文庫』目録」（一九九・三）四九頁。堀内文庫は興居島（松山市の西）の旧庄屋堀内家（堀内長郷・昌郷・匡平の三代にわたり国学者・歌人を出した名家）からの寄託本（一九八六年）。福田安典「寄託図書館 堀内文庫について」（愛媛大学図書館報 図書館だより）五七号、一九九九・六・三〇）など参照。

34 水府明徳会彰考館文庫蔵（平家物語太平記内歌集）

（整理番号、巳・九）

小本一冊。表紙（二三・八×一五・〇糎）左肩に題簽（一六・一×

三・五糎）を貼り「平家物語／太平記 内歌集 全」と墨書、表紙右に「巳／九／小五十六」のラベル。一面八行、和歌は二行書、漢字平仮名交、墨付二七丁。印記、巻頭右肩に「潜龍閣」の縦長構田朱文、右下に「萬年稿南散人／圓齋画鏡藏書」の長方形単郭朱文。印主未詳。二七才に奥書「日静（花押）／慶安五壬／辰年七月下旬書之。」「潜龍閣」は水戸藩第九代藩主徳川斉昭（一八〇〇～一六〇〇）の蔵印、彰考館に「潜龍閣御書目」（亥八、写本）・「潜龍閣藏書目録」（亥九、写本）がある由だが未見。

「平家」・「太平記」の和歌をを抜粋したもので、欄上に巻・章段名を記し、その下に和歌を二行書きし、欄下に作者名を書く。「平家」は、内題「平家物語哥集」とあり、巻一・鱧の「有明の月も明石の浦風に／なみはかり杜よると見えしか」（忠盛）から灌頂巻・御往生の「いさらは涙くらへんほと、きす／われも憂世に音をのみそ鳴」（女院）までの九七首を掲載する。「太平記」は「三ウ」からで、内題「太平記哥集」とあり、劔巻の「わか国の梅の花とは見たれとも／大宮人はいか、いふらむ」（宗任）から巻四〇・中殿御会の「さきにはふ雲居（井）の花の本つ枝に／百代の春をなや契らむ」（御製）までの一〇八首を載せる。巻頭三首は「太平記」劔巻（慶長一五年刊古活字本）の和歌である。巻一五に「賀茂神主改補事」があり、巻二二存、巻二五～二七・巻三九・四〇の巻区分のあり方から見て依拠本文は流布本であろう。

ただ巻二五・自伊勢遣宝劔の箇所では「廿六 宝劔執奏イ」とし

「思ふ事なと問人のなかるらんあふけは空に月そさやけき 神哥」を追記しており、この段が巻二六にある本（甲類本）も参照していることが判る。またその直後、「香久山の葉若の下に」の歌と「八雲立出雲八重垣」との間に、「小蠅なすあらふる神もあらしかしけふは名越のはらへしつれば」の歌を記しており、これは神宮徴古館本（七六〇頁）・南都本系諸本にのるものである。天正本も同歌を載せるが第二・五句に異同がある（新編全集二七〇頁）。巻二七・田楽の条では、「四条河原ニ札ヲ書テ 去年ハいくさ今年ハ棧敷討死の所ハ同し四条也けり 落書」と追記がある。この歌は南都本・毛利家本・陽明文庫本・天正本（新編三二八頁）・慶長一五年古活字本等に載る。「小蠅なすあらふる神も」の歌は慶長一五年古活字本には載らず、本書の編者は恐らく南都本系統の異本も参照したのであろう。

本書奥書の慶安五年は一六五二年、日静は浅井政尹の法名とみてよいか。政尹は寛永二年（一六二五）生れ、元禄七年（一六九四）八月没、千石取りで狂歌もよくしたという（『国書人名辞典』二・二八四頁）。「参考太平記」刊行（元禄四年へ一六九二）以前に、異本をも参照して和歌抜書が作られていたことは注目に値する。

〔目録〕「彰考館図書目録」（一九七七・一一、八潮書店）四一九頁、書名「平家物語太平記内寄集」とあり。

〔備考〕東京大学史料編纂所蔵「潜龍閣函次目録」の二冊目（RS二〇〇〇・三五・二）の第五六に「平家物語歌集 一／太平記 一」と載るのに該当するだろう。国立公文書館内閣文庫蔵「類字潜龍閣書

目二（二一九・一四九）の「たの部」に「太平記歌集 五十六」とある。

35 静岡県立中央図書館あすなる県立図書館収蔵庫久能文庫蔵（太平記之詩歌連）

（整理番号 久能文庫 Q九一三・一）

写本一冊。

後補薄茶色表紙（二四・〇×一六・四種）、左上に後補題簽（双郭）を貼り、「太平記之詩歌連」と墨書。匡郭（単、二一・〇×二一・八種）、界線あり（幅一・一種）。柱刻下に「湯俗文庫」と印刷した用箋使用。一面二一行、漢字片仮名交（一部平仮名交）、朱の書入あり、墨付一〇丁。見返しに「関口氏寄贈／久能文庫」の長方形単郭朱文、その下に貼り紙「昭和3・6・11登録／2239／静岡懸立葵文庫」。巻頭右肩に「静岡懸立／葵文庫／藏書之印」の方型単郭朱文。久能文庫は初代静岡県知事・関口隆吉（一八三六〜八九、言語学者新村 出の父）の収集になる江戸時代から明治中期までの和漢書を収める。

本書は「太平記」中より和歌・漢詩・頌を抜書したもので前後の本文はごく簡略。一例を示す。

巻ノ十鎌倉攻普恩寺前相模入道信忍自害之段、ノ子息越後守仲時六波羅ヲ落テ、江州番場ニテ腹切給ヌトノ告タリケレハ云々、一首ノ歌ヲ御堂ノ柱ニ血ヲ以テ書付給ケル、ノ（合点）待暫シ死出の山辺の旅の道同く越て浮世を語らん 信忍（大系三四三頁相

当)

卷七・一〇・一一・一三・一五・一六・一七・一八・二〇・二二・二七・二九・三三・三五・三六から引く。辞世・遁世の場面が多い印象はあるが網羅的ではない。賀茂神主事は巻一五にあるなど、引用箇所所在巻からみると依拠本文は流布本と思われる。

〔目録〕「静岡県立中央図書館 久能文庫目録 増補改訂版」(一九八九・一〇)一〇六頁左。

36 静岡県立中央図書館あすなろ県立図書館収蔵庫久能文庫蔵(太平記抜書)(仮称)

(整理番号 久能文庫 Q九一三・五)

写本一冊。

後補薄茶色表紙(二二・七×一四・九糎)、左上に後補題簽(双郭)、「太平記」と墨書。一面二三行、漢字片仮名交、朱の書入あり、墨付二九丁。「太平記之詩歌連」と同じ装丁で同筆ならむ。見返しに印記「関口氏寄贈/久能文庫」(長方形単郭朱文)。「太平記」の摘記、ただし合戦記事でなく、説話的な興味からか。頌・詩歌・牒状を含む部分か、宝剣進奏は長文を引く。

〔目録〕「静岡県立中央図書館 久能文庫目録 増補改訂版」(一九八九・一〇)一〇六頁左。

*なお「小城鍋島文庫目録」(一九七六・九、佐賀大学附属図書館)

四〇頁に掲載の「太平記歌」(〇九二八)は、「太平記」の和歌ではなく、「時鳥名をも雲井にあくるかな弓はり月のいるにまかせて」以下、「雨無やくしあはれみ給へ世の中にありわするふもやまいならすや」までの一四〇首を載せる。「源平盛衰記」の和歌の抜書。

〔部分的な抜書・抄出〕

37 天理大学附属天理図書館蔵(銘肝腑集鈔)

(整理番号 〇九一 イ七五)

写本一冊。斑山文庫・宝玲文庫旧蔵。

牡丹唐草模様布地の一帙に収む。帙の題簽(左肩)に「九條家本/銘肝腑集鈔/異本太平記/永正四年以前古寫本/高野辰之博士舊蔵」とある。後補青色雲形模様表紙(二八・二×二三・五糎)の中央上に金砂子散し模様題簽(一七・四×三・〇糎)を貼り、「銘肝腑集鈔」と墨書。見返し本文共紙、見返しに後掲高野辰之識語を貼る。内扉中央に「銘肝腑集鈔和漢/愚勳 井古詞等」とし、左下方に「重祐之」とある。

一丁目表に「太平記序 公家方異名 名所盡并奇詞 阿伽之事/源氏付会 飛梅申詞 一女三男問答」とあり、内容の目次を示す。二丁目表、内題「太平記上之ノ上ノ序」、以下「太平記」の序文「夫採天地之正理察安危之所由・・・」から始まり、「関所停止事 并施行事」・「女御入内事」の「婦人ノ身ト百年ノ苦楽因他人ニ白楽天ノカ、レシモ理リ也ト覚タリ」(大系三九頁二二行相当)までの本文を

記す（六丁目裏まで）。この部分、漢字片仮名交、一面一〇行、字面高さ約二・五・五種、一筆書写。楮紙袋綴四穴、綴糸紫色。

以下、「公家方異名」（七〇〜八ウ）・「初學鈔中」（九〇〜二〇ウ）・「六種供養事」「四重秘尺」など（二一〇〜二二オ）・「光源氏一部運歌寄合付詞」（二三オ〜三四オ）・「飛梅申詞」（三四ウ〜三六オ）・「問日本紀一男三女問答」（三七オ〜三八ウ）から成り、その奥に「永正四年丁卯初冬上幹之比得之、本来是ノ慈父兼守法師之持者也、次第之相得未代重ノ寶也、轍外見不可許者歟、秘藏 重祐（花押）」とある。

表紙見返しに高野辰之識の貼紙がある。その全文以下の如し。

此ノ書銘肝腑集鈔一卷モト九條家ノ藏也、何人ノ抄録カ明ノナラズ、名所尽源氏付合飛梅申詞、皆有用珍奇ノ文字ナリトイヘドモ、卷首太平記抄ノ数紙最モ尊ムベシ、題下ニ上之上トアリ、コレノ九卷又ハソレヨリ少キ卷ヨリ成レル太平記ノアリシヲ告グルモノ也、而シテ太平記ノ最古ノ写ト称セラル、神田本ハ、流布本ト同ジク四十ノ卷ヨリ成シヲ思ヘバ、此ノ書ノ更ニ古様ヲ存スルヲ知ルベシ、記事ノマタ之ヲ証ス、序ニアリテ高時ノ乱違ヨリ数ヘテ、今ニ至ルマテ四十餘年トナスモノハ流布本也、三十餘年トナスモノハ神田本也、而シテ此ノ書ハ實ニ二十餘年トナセリ、コレ其ノ最モ古キ一証也、此他序ノノ分段ヨリ見ルモ、此ノ書最モ当ヲ得タリ、行文訓讀用字等ノ古体ノナルハ更ニモイハズ、ノ奥書ニヨレバ、此ノ書ハモト兼守法師ノ藏ナリシヲ、永正

四年子ノ重ノ祐ガ獲得シテ秘藏シタルモノナリ、兼守重祐ノ傳來未ダ詳ナラザレド、ノ永正ヨリ四五十年ヲ遡リタル頃ノ写トナスベク、少クトモ應仁文ノ明ヲ下ラザル書ナリトイフベシ、ノ

昭和四年十二月十二日 斑山文庫主人高野辰之識

（*傍線長坂）

永正四年は一五〇七年、高野は本写本を応仁・文明（一四六七〜一四八六）頃の古写とみている。兼守・重祐は未詳。

印記、一オ右上に「天理圖書館藏」（長方形単郭朱文）・同右下に「寶玲文庫」（長方形五・六×一・八種）単郭朱文、裏表紙見返し下方に「月明莊」（長方形二・六×一・三種）、単郭朱文）・「斑山ノ文庫」（方型四・六種）単郭朱文。本書は九條家↓高野辰之↓フランク・ホーレー↓弘文莊↓天理圖書館と伝来したか。

本書には高野識語の傍線部の記述により、成立年代考証の手懸りとされた研究史がある。

〔目録〕「天理圖書館稀書目録 和漢書之部 第三」（一九六〇・一〇）四二頁上。

〔参考〕

・高野辰之「太平記作成年代考」（『古文学踏査』所収、一九三四・七、大岡山書店）。

・「高橋」一一頁。

〔備考一〕昭和四年二月、九條家の本が売りに出され（一誠堂書店）この中に「九五 太平記 永正寫本 一冊」（『入札目録』八頁下）

があり、これに該当。反町茂雄「二古書肆の思い出 1 修業時代」(一九八六・一、平凡社)の二二二頁以降に記事あり。

〔備考二〕本書を亀田純一郎氏が忠実に影写した写本が市場に出、現在某氏蔵である。その末尾に「銘肝腑集鈔一冊斑山文庫所蔵本ニシテ九條家ノ舊蔵本ノナリ、影写シテ架蔵ニ加フ/昭和五年一月四日亀田純一郎識」とある。備考にあるように本書が売りに出されたのは昭和四年(一九二九)二月で、亀田氏は本書が高野辰之氏の蔵に帰してすぐに影写したものか。高野辰之の古典籍蒐集に関しては、武井和人「古典籍学者としての高野辰之」(『日本歌謡研究』四五号、二〇〇五・一二)参照。

38 宮内庁書陵部蔵〔管見記〕紙背・太平記断簡

(整理番号 (圓) 一〇五、特一〇六)

原本未調査、〔翻刻〕長谷川氏論文による。

西園寺家の家記「管見記」全一〇五巻中の第一〇〇巻にあたる一軸。浅葱鼠色無文、鳥の子紙軸装、軸は八角(檜材)、紐は真田平紐。外題・内題なし、端裏書に「太平記切かさしたる事なし」とある。見返し楮紙、紙高二六・三糎、一葉長さ約四三糎。もと冊子本袋綴の八葉を継いだもの、第四紙と第六紙を除く六葉に「太平記」巻一三の部分を書写、他の面には「平治物語」を書写している。八葉の順序は正しくない。書写年代は、室町中期、一六世紀初頭の永正・大永年間(一五〇四～一五二八)を下らない頃とする。

本書は巻一三「眉間尺鉦鎖劍事」の眉間尺の故事の話の最後(新編全集二・一三三頁八行目「物は皆一同にぞ感じける。」から、同巻の末尾(同一四二頁)までに該当、本文はほとんど天正本に一致し、長谷川氏論文は「天正本系テキストの意外に古い成立を首肯させてくれるであろう」(二三六頁)と結ぶ。

〔目録〕

・「和漢図書分類目録 下」(一九五三・三、宮内庁書陵部) 八八八頁上。

・「図書寮典籍解題 歴史篇」(一九五〇・二、養徳社)の「管見記」の項、「三、部類記次第等」に「太平記断簡/巻第十三」足利殿東国下向の事」の断簡、八枚(一〇七頁下)。

〔翻刻〕長谷川 端「管見記・太平記断簡」(『太平記 創造と成長』第四章、二〇〇三・三、三弥井書店)。

〔備考〕山崎 誠「宮内庁/書陵部蔵「管見記」巻六紙背「括地志」残巻について―付翻刻―」(『中世学問史の基底と展開』Ⅲ、一九九三・二、和泉書院)は、同じく「管見記」第六紙背に残る、唐代の地理書「括地志」(全体は亡佚)を紹介したもの。

39 聖衆来迎寺蔵〔法流相承西門断陳記〕付載、太平記抜書

原本未見。以下は〔参考〕の近藤喜博氏論文、および〔備考〕の東京大学史料編纂所蔵謄写本による。

美濃判袋綴「法流相承西門断陳記」(法勝寺と元応寺との門流相承

に關する両者の訴陳状を蒐集したもの。『法流相承兩門訴陳記』は表紙中央に「法流相承兩門訴陳記」と墨書、右下に「元応寺常住」、内題「法流相承兩門訴陳記、連々訴状、依事繁略之、并和尚御／自筆附屬状等、一々不能載之、追可披覽哉」として、關係文書（延文二年二月から文安四年二月まで）を収め本文五六丁、うち四五丁から五四丁にいたる一二丁（二面八行）に「太平記」が抜書されている。『法流相承兩門訴陳記』の書写は、「文安五年八月法（比カ）押小路室町草庵ニテ清書之沙門鎮増記之七十ノ一歳」とある本奥書により、少なくとも文安五年（二四四八）八月、鎮増によつて写されたものであろう。この本奥書に續いて、宝徳三年（一四五二）六月、源英（四五歳）が江州高嶋大谷寺南坊にて、慶讃大徳聚集の本を書写した旨の奥書がある。抜書は卷二、南都北嶺行幸事・為明卿歌事・諸上人関東下向事に相当し、『太平記』關係部分は「サレハ、此上人達モ何ナル修因感果ノ道理ニ依テ、カ、ル不慮ノ罪ニ沈ミ給ヌラン、不思議ナリシ事共ナリ」で終る。その後、恵鎮上人の事績を記した中に、つぎの記述がある。

私云元徳年中和尚、関東下向事、就不慮之横禍、示ノ奇異之勝徳給、專在世之昔、弥為未来際之敬信、ノ太平記之内被撰寫之ノ依有旧本令書寫之畢 於東山元應寺ノ于時宝徳三ノ六月上旬云々

小字部分が太平記抜書の年次を示すものであろう（翻刻一〇五頁参照）。わずか一二丁とはいへ文安・宝徳年間書写の「太平記」として貴重である。

〔参考〕近藤氏論文が言うように、本抜書の依拠した「太平記」は西

源院本とは別系統のもので（西源院本に沙門処刑記事はない）、また、

後人の補入部分を除いた神田本、或いは玄玖本などかなり近似しているといえるが、詞章の細部には、なお小異を存するし、章段のたて方、章段名も一致しないのであるから、おそらく現存しない一本によつたものと思われる。（三〇四頁）

という〔参考〕加美氏論文の指摘は首肯できる。その小異に該当する箇所を二、三挙げておく。大塔宮が武芸に励むことを記す場面、

早業ハ江都賀桂健ニモ超タレハ、七尺ノ屏風、（翻刻一〇一頁下）

とするが、神宮徴古館本には「早業は江都か軽捷にも超たれば」（二四頁）とある。抜書（またはその祖本）は、「か軽捷」の部分を誤読してか、「賀桂健」という人名らしきものに改めたのであろう。

二条為明逮捕の箇所を引く。

此ノミナラス、智教、々円二人モ南都ヨリ召出サレテ、〔同六波羅へ出給フ、二条ノ中将為明ハ歌道ノ達者ニテ、月夜雪ノ朝、褒貶ノ歌合ノ御会ニ召レテ、宴ニ侍ル事隙無しカハ、指タル嫌疑ノ人ニハナカリシカトモ、慮ノ趣ヲ尋ね問レン為ニ召取レテ、〕斎藤ニ是ヲ預ラル、五人ノ僧達ノ事ハ、*六波羅ニテ尋究ムルニ及ハス、為明ノ卿ノ事ニライテハ、先ツ京都ニテ尋沙汰アリテ白状アラハ、関東へ注進スヘシトテ、檢断ニ仰付テ已ニ拷問ノ沙汰ニ及ハントス、六波羅ノ小ツホニ炭ヲオコス事、

（翻刻一〇二頁上）

神宮徴古館本は、まず「」の部分がなく、*の箇所「元來関東

え召下されて沙汰あるへき事なれば」(二五頁)が入る。さらに二重傍線の代わりに傍線部の詞章が入る。神宮徴古館本は僧達についての記事を終えた後に、二条為明の記述に移り、分かりやすい。抜書は二条為明の記事の途中に五人の僧のことが入り込み(波線部)、文脈にやや混乱が見られる。抜書(またはその祖本)の誤写といふべきであろうか。「諸上人関東下向事」の後半は天竺の沙門が誤って処刑される話で、処刑後に帝が激怒する場面、つぎのようにある。

帝大ニ逆鱗アテ、死ヲ行ヲコト定テ後▲、罪大逆ニ同シトテ、則彼ノ伝奏ヲ召出シテ、(一〇四頁上)

神宮徴古館本は▲の箇所「必三奏すといへり、然るを一言の下に誤をおこなつて朕か不徳をかさね畢」(三〇頁)が入り、文意が明瞭になる。これを欠くのは脱文であろう。

〔翻刻〕近藤喜博「資料編」太平記抜書・その小解(「伝承文学研究」八号、一九六六・一一)。

〔参考〕

・近藤喜博「太平記抜書」(かがみ)一〇号、一九六五・三三。

・加美 宏「島津家本「太平記」異文抜書ほか」(「加美」第三章第一節)。

〔備考一〕東京大学史料編纂所に謄写本あり(整理番号 二〇一四・二九)。「法門相承両門訴陳記」(一九三三年作成、六二丁)。末尾に「右ノ法流相承両門訴陳記ノ近江滋賀郡下坂本村来迎寺所蔵ノ大正十二年十一月寫了」とある。

〔備考二〕鎮増については「鎮増私聞書」(「續天台宗全書 史傳2」所収、一九八八・二、春秋社)、田中貴子「室町お坊さん物語」(講談社現代新書)(一九九九・六、講談社)など参照。

40 国立公文書館内閣文庫蔵(神木入洛記)

(整理番号 古文書・二四・四一九)

原本未見、以下は紙焼写真による。

写本一冊。

改装表紙(約二九・〇×二二・〇糎)の左肩に題簽(双郭)を貼り「神木入洛記 全」と墨書。その次の扉の内表紙(茶色斜格子模様)中央に打付書「尋尊御筆ノ神木入洛記 貞治三年ノ河口庄事」、左下に「大乘院」と墨書。遊紙一枚あり、その次に原表紙「神木入洛記貞治三年ノ河口庄事」。内題「神木入洛事」。本文は漢字片仮名交、一面九一―二行。墨付一〇丁。文書の反故に書写したものを台紙に貼る。印記、内表紙ウ左下・原表紙左下に「日本ノ政府ノ圖書」(方型岸郭朱文)、巻末下に「内閣ノ文庫」(方型岸郭朱文)。本書は、南都興福寺大乘院の所領である越前国河口庄を斯波高経が押領した事件に端を発する春日神木入洛・高経失脚・神木帰座のことを記しており、「太平記」巻三九「神木入洛付洛中変異事」「諸大名讒高経入道道朝付大原野花会并道朝下向北国事」「神木帰座事」(大系四四〇―四五〇頁相当)にあり、「太平記」の抜書と思われる。反故である裏文書に載る人名などから勘案して、「神木入洛記」は寛正四年(一四六三)以降明応七年

（二四九八）までに書かれたものであろう。この時期の「太平記」写本はきわめて稀少で、抜書であるにしても貴重、本文は梵舞本に近い。

〔目録〕「改訂内閣文庫蔵国書分類目録 上」（一九七四・一一）一八二頁下。

〔翻刻〕

・長坂成行「内閣文庫蔵『神木入洛記』——『太平記』抜書の類として、付録 刺——」（奈良大学紀要）一六号、一九八七・一一。

〔参考〕

・後藤丹治「太平記の研究」（一九七三・三再版、大学堂書店）一四二頁。

41 東京大学史料編纂所蔵（徳大寺家本太平記拔書）

（整理番号 徳大寺、0931-1）

江戸中期以降写、一冊。

灰色表紙（二七・〇×一九・九釐）、左上に「太平記 北山殿むほんの事」と墨書。本文は漢字平仮名交、一面九行、楮紙袋綴。墨付九丁。印記、一丁才右上に「徳大寺蔵」（縦長長方形で上下丸み単郭白文）、右下に「藤印／公迪」（方形 三・二釐）単郭白文。徳大寺公迪は権大納言実祖息、明和八年（一七七二）生れ、正二位権大納言、文化八年（一八一二）七月二五日没、四一歳（公卿補任五・二〇五頁下）。内容は巻二三「北山殿謀反事」の段のみの抜書。「太平記巻第十

三／北山殿むほんの事／故さがみ入道の舍弟」ではじまり、「北山右大将実俊卿これなり、下略」で終る。中に「下として上をおかさんとくはたつるはつこのほとこそをそろしけれ」とある点は流布本に同じ（大系二六頁相当）。

42 三原市立図書館蔵（太平記劔巻）

【国フ222-103-2 紙E10261】

原本未見。【小秋元】および国文学研究資料館蔵紙焼写真による。

本文共紙表紙（二四・六×一七・二釐）の左側に「太平記劔巻」と打付書。大和綴。内題「太平記劔巻」、劔巻の全文を記す。漢字片仮名交、一面二行。つぎに巻二八「誓源禅巷南方合体事付漢楚合戦事」の途中からと、「太平記三十巻殿村王事」と題し、同段の記事を引く（漢字平仮名交、一面一〇行）。

43 弘前市立弘前図書館蔵（中殿御会事抜書）

（整理番号 下沢文庫・五三六 W1133・八、二〇）

原本未見、複写による。写本一冊。

表紙左上題簽に「大學經典餘師抜書／官職、太平記抜書」とあり、二四丁才に「太平記巻第四十／中殿御会之事」とし、以下「貞治六年三月十八日、長講堂へ行幸有」と同章段本文を書き、三三丁ウ「目出度なんといふ斗なし云々」（大系四七四頁相当）で終る。漢字平仮名交、一面二行。江戸末期写。一才は「巻一／聖人の道とは天下國家

を語るよりして」で始まり、「經典餘師」(経籍の自学自習書)の抜書か。一オ上に「昭和26年11月/下沢 保寄贈」との印あり。同右下に「弘前市立/弘前図書館/蔵書」(横長楕円横書単郭陽刻ゴム印)。「經典餘師」については鈴木俊幸「江戸の読書熱 自学する読者と書籍流通」(二〇〇七・四、平凡社選書)第三・四章参照。

〔目録〕「弘前図書館蔵書目録 和装本の部その二」(一九六七・九)一〇頁右には「大学經典余師拔書 附官儀・太平記拔書/溪世尊/写(下沢保躬) 一冊 半紙半 和」。

44 天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵(太平記腰状の類拔書)

(整理番号 八三・吉四四)

楮紙四枚(縦二五・五種、横未詳)。虫食多し。書状(五月十八日〔花押〕のみ判読)の紙背に「太平記」中と推定される三点、建武二年十一月日興福寺衙(一枚目)・新田義貞腰状(二・三枚目)・延暦寺由来(四枚目)を記す。

〔目録〕「吉田文庫神道書目録」(一九六五・一〇)三〇三頁上。

45 山口県文書館蔵(出羽元実書写太平記断簡)

「出羽家文書」の中にあり、「出羽元実記録断簡 永禄10年6月28日 1」と記した封筒に収。巻一六の末尾四行分のみ(「染肝ニ給ケレハ」から「只軍ヲノミ業トセリ」まで。補正行が亡父正成の復讐を誓う場面で大系一七一頁に該当する。詞章は神宮徴古館本や大系本と

は異なり、國學院大學図書館蔵益田本と用字まで一致する。楮紙一枚を袋状に折る。大きさ二八・二×二〇・五種。漢字片仮名交、付訓墨書(本文と同筆)、朱点・朱引・朱書送り仮名あり。末尾は「十六終リ 民部太輔/伴元實(花押・朱) /永禄十年六月廿八日」。「伴元實」とある右上に「四拾二帖之内」と朱書する。全部で四二帖あったことを示すか。出羽元実(石見国邑智郡の国衆で、彼が永禄一〇年(一五六七)に書写したもの。出羽 正「出羽家古文書抄」(一九八八・三)に本断簡の流伝についての記事あり(参考)拙稿参照。

〔参考〕

- ・岸田裕之(「史料紹介」岡本正子氏所蔵の口羽通良書写「太平記巻第廿六」一冊)「山口県地方史研究」八九号、二〇〇三・六。
- ・岸田裕之・中司健一「永禄三年の口羽通良書写「太平記巻第廿六」——その解説と翻刻——」(「内海文化研究紀要」三三二号、二〇〇四・三)。
- ・「平成15年度 秋の企画展 安芸吉川氏とその文化——今よみがえる戦国時代の新たな歴史像——」(二〇〇三・一〇、広島県立歴史博物館)一六頁 二一参照。
- ・長坂成行「管見「太平記」写本二、三——伝存写本一覽、補遺——」(汲古四六号、二〇〇四・一一)。

〔古筆切〕

以下二点は小林 強「太平記の古筆切について」(指定研究 龍谷大

学図書館蔵「太平記」の研究」〔主任 大取一馬〕、「佛教文化研究所紀要」四五集、二〇〇六・一一）による。

46 平成一四年七月第五二回「東西老舖大古書市出品目録抄」掲載（伝浄通尼筆太平記切）

原本未見、所在未詳、当該目録未見。目録一六八番に「浄通尼筆、古筆琴山極札、浄通一足利幕府第十三代將軍、義輝の母。24 cm × 15 cm」。図版によればほとんど平仮名の漢字平仮名交、九行存。小林氏論文の翻刻および詳細な解説に譲るが、本文は卷三二「土岐参向御幸狼籍之事」の一節、「はてんかの大ちしき……しゆさいはうとて」、夢窓のとりなしもむなしく土岐頼遠が処刑された場面である（「神宮徴古館本」六九四頁三行～六行相当）。玄玖本系統に近い本文かという。群馬県立歴史博物館本・京大本などいくつかの平仮名表記本に徴してみたが、一致する写本は未勘。未詳の伝称筆者浄通尼の問題も興味深い所である。

47 「物語古筆断簡集成」所載（伝一条兼冬筆太平記切）

久曾神 昇編「物語古筆断簡集成」(二〇〇二・一、汲古書院)に「第七〇図 伝一条兼冬筆平家物語 一・三・五種×一四・五種(一四二頁)として載る、漢字平仮名交断簡一六行。「南部は此比世に勝たる……是をみて首藤」、卷三二「京軍事」の一節(大系二四三頁、天正本では卷三二「東寺合戦事」、新編全集八三頁相当)。小林氏論文

によれば天正本系統の本文だが、天正本・教運本(義輝本)ともに微差があり、現存が確認されていない天正本系統の伝本の存在を示唆するものか、という(三七頁)。46は室町後期の書写、47はそれをやや下るかと思されるが、写本時代の本文が存在する意義はいうまでもなく、いわゆる完全校合を課題としたい。

〔その他〕

以下、他の資料に引用された「太平記」の詞章は限りなくあろうが、ここでは本文研究にいささかでも資するかと思われるものを、私意の範囲であげてみる。

48 早稲田大学図書館蔵(伝三条西実枝筆「源氏物語」表紙裏反故のうち、太平記抄出)

(整理番号 へ二、四八六七、五一)

原本未見。(参考)新美氏論文による。

三条西家旧蔵「源氏物語」列帖装五四帖。表紙裏反故に四点の「太平記」写本が用いられている。

・賢木「ときまさつとにおきてらうをうの……身をはなさすまもりと成」(大系卷三二「直冬上洛事付鬼丸鬼切事」二二六頁五行から後五行までに相当)。

・花散里「つな去る文和二年六月……さまのかみ殿に向ひて申され」

(大系巻三四)「宰相中将殿賜將軍宣旨事」二七七頁六行から二七七頁後一行まで。

・真木柱「是より御車をはやめられ・・・石地藏を過させ給ひける」

(大系巻二)「天下怪異事」八四頁後三行から八五頁三行まで。

・竹河「さい人にむかひいかれること・・・心地しておそろ」(大系巻二〇)「結城入道隨地獄事」三三三頁後三行から三三三頁二行まで。

ほぼ大系に同じだが、平仮名交表記でもあり直接の依拠本は未詳。

〔参考〕

・新美哲彦「伝三条西実枝筆「源氏物語」の表紙裏反故―翻刻と紹介・

文学資料集―」(『早稲田大学図書館紀要』四七号、二〇〇〇・三)。

49 金沢市立玉川図書館近世資料室加越能文庫蔵(「越後在府日記ひろ

い草」のうち「太平記抜書」)

(整理番号、特一六、九三、一、三、三)

写本三冊。

薄茶色表紙(二三・五×一七・一)の左肩に刷題簽(単郭(二六・

五×三・〇)を貼り、「越後在府日記 ひろい草 上(中・下)」と墨書。

藍色罫線(字高二〇・三)種、一行一〇種、一面(三三行)あり。漢字

平仮名交(片仮名混用)。明治年間写。本奥書、上巻末尾に「越後在

府日記上終早/慶長九甲/辰載夷則仲流/中原秀種」、中巻末尾に「于

時慶長九甲/辰年夷則仲流/中原秀種」、下巻末尾に「右此上中下三冊

之事、去慶長之年初已天下乱しかは/京方に有会者共、関東為御下知
国々に被為配流、予/越後国左迂つれくのみあまり、不願他嘲書記侍
なり、/後見其懼多し/于時慶長九甲/辰夷則仲流 □□(虫損)
秀種」。

奥書および〔備考〕福田氏論文から要点を摘記すれば、本書の著者
堀秀種(信長・秀吉に仕えた秀政の弟、元和二年(一六一六)没、五
二歳あるいは四九歳)は、関が原の合戦の後、前田利常を頼って北国
に盤居していたが、慶長六、九年頃越後春日山の甥秀治(秀政嫡子)
のもとで諸書を抄出して、慶長九年(一六〇四)七月中旬に清書した
ものという。「枕草子」「方丈記」「徒然草」その他和漢の諸書の抄出
と注解で、慶長当時の本文の流布状態、鑑賞態度などを窺う上での好
資料と言える。

「太平記」関係の抄出は以下のごとし。上巻(目録は一、四六)の
一四項に巻一四の矢作川合戦での長浜六郎のこと、中巻(目録は一、
二七)の二三項に巻一二の隠岐広有怪鳥を射ること、二五項に巻一九
の尊氏將軍就任のこと、下巻(目録は一、六五)の二項に巻一六の正
成首を六条河原に懸けることあり。以下に引用する。

京童部の申けるは、去年もあらぬ者の首を桶がとて乗たり、去
元弘にも耐れぬとばかりし正成はよもうたれし/など、各申さ
たしければ、例の狂哥を/疑は人によりそ残棄まさしけなるは桶
か首/と高札にかきて獄門の傍にぞ立にける、

抄出が原本にどの程度忠実になされたかはわからないが、この部分諸

本と見比べてみると、少なくとも流布本とはかなりの懸隔があり（大系一六九頁）、傍線部の表現に近いのは西源院本（四六二頁）で、波線部に完全に合致するのは米沢本であることは少しく注意される。下巻一九項に巻一六日本朝敵のこと、三〇項に巻一七の遷幸供奉の人々禁殺のこと、四三項に巻二四の応和の宗論のこと、五七項に巻二七田楽棧敷倒壊のことが引かれる。田楽の件、「去年は軍今年は棧敷打死の所は四條川原なりけり」の落首あり。他本を検するに、「所は」のあとは「同じ四條なりけり」とある箇所だが、米沢本（巻二八・一二ウ）は「同じ」を欠き本書と一致する。正成首の記事とこの落首の二件だけで、堀秀種が見た「太平記」は米沢本であるというのは、きわめて早計で現に他の箇所でも一致しない点もあるが、彼が米沢本の類を見たかもしれないという可能性は否定できないだろう。またこのころ慶長七年・八年に古活字本の刊行があるが、披見の有無は微妙な所である。

〔目録〕「加越能文庫解説目録 下巻」（一九八一・五、金沢市立図書館）六一五頁右。

〔備考〕本書については、早く稲賀敬二「越後在府日記（ひろひ草）所載「枕草抜書」解説」（紫式部学会編『源氏物語・枕草子 研究と資料』（古代文学論叢第三輯）（一九七三・一、武蔵野書院）に要点が解説されている。福田秀一「越後在府／日記所引「古今狂歌抄」（翻刻と解説）」（白田甚五郎博士還暦記念論文編集委員会編『日本文学の伝統と歴史』（一九七五・六、桜楓社）に、本書中に「太平記」の抄書があること

の言及があるが、具体的な紹介はされていない。なお本書は広島大学文学部国文学研究室蔵の写本（現、広島大学附属図書館中央図書館貴重資料室蔵、国文二二六四、日二一九）の方が自筆原本らしいが、未見。

50 不如草文庫蔵（内典外典雜抄）のうち、太平記拔書（仮称）

原本未見、複写による。

写本一冊。「一誠堂古書目録」五九号（一九八三・一二）に「内典・外典雜抄 江戸初期明暦頃筆 漢詩・和歌・太平記等の抜書その他」（二二九頁下）。一面八行、漢字平仮名交、諸書の抜粹や覚書。

複写により適宜内容を記すと、太平記巻一、昌黎文集赴潮州ト云長篇有、（中略）慶安龍集壬辰仲春（慶安五年（一六五二）二月）如意珠曰、（中略）太平記巻六、天王寺未來記記文、吳越戰、（中略）太平記巻二、為明詠歌、天竺波羅奈國の故事、（中略）太平記中の和歌、平家中の和歌、時頼の歌など、（中略）以下、花町宮、甲州八宮石水寺、長嘯、後光明天皇（一六三三～五四）御追善、乙未歲旦正月朔日立春（明暦元年（一六五五）か）、同十一日於御城御連歌、帝有王山での詠歌、藤房詠歌、具行、八歳宮の歌、津守国夏歌、資朝・俊基辞世、正保五（一六四八）四月七日天野同三二月十三字治南都一見、など。散見する年次から正保・明暦の頃の覚書であろうか、「太平記」からの抜粹が多いのは注目される。花町宮は後の後西天皇（一六三七～八五）のこと。仔細に検討すれば記者などの特定も不可能ではな

ろう。依拠本文は未確認だが「参考太平記」(二六九一年刊行)以前の資料で注意される。

51 「武器考證」所収(異本太平記抜書)

原本未見、所在未詳。

武器に関わる一六項目の詞章の掲出。掲出巻数や詞章などから、丁類本に依拠すると推測されるが、直接該当する本は未確認。

〔翻刻〕「武器考證」巻一七「異本太平記抜書」(増訂故実叢書 二〇) 三八二〜三八四頁)。

〔参考〕

・長坂成行「写本太平記／参考太平記 見合抜書」解説、付「軍記抜書九種」覚書(「奈良大学紀要」二二号、一九九三・三)。

52 素行文庫蔵(太平記抜書)

原本未見、所在未詳。

〔素行文庫目録〕(一九四四・九、平戸素行会)五九頁に「ヶ七 八 八三〇 太平記抜書 大 一 惟十八」とある本。「惟」は「惟揚庫書籍目録」(一九三八・三)に載る(同目録九九頁)。

53 旧浅野図書館蔵(太平記抜書)

〔国書総目録第五卷〕四七六頁。焼失か。

「太平記抜書」の類、関連年表

月日のうち日は不記、ただし同年に複数の事項ある場合は示す。原則として奥書・識語に拠る。楷書部分は記録類に見え、現物は未確認。* 印は「太平記抜書」書写以外。

(和暦) (西暦) (事項)

応安七 一三七四 * 四月末、「太平記」作者小島法師没。

宝徳三 一四五二 六月上旬、源英、「法流相承阿門断陳記」付載

〔太平記抜書〕書写。

延徳三 一四九二 太平記二十九抜書有(蓮成院記録)。

永正四 一五〇七 一〇月上旬、重祐、慈父兼守法師より「銘肝腑集鈔」を受く。

〔太平記抜書〕書写。

永正一五 一五一八 四月、中御門宣胤、太平記抜書一巻を駿河守護

(今川)に遣わす(宣胤卿記)。

大永元 一五二二 「太平記聞書」、延徳二年(一四九〇)以後、

永正年間(一五〇四〜一五二〇)頃までに成る

か。

天文二二 一五四三 * 一月、「太平記賢愚抄」跋文年紀。

水禄一〇 一五六七 六月、石見の出羽元実、巻一六を書写。

慶長八 一六〇三 * 三月、慶長八年刊片仮名古活字本刊記。

慶長九 一六〇四 七月、堀秀種、越後にて「太平記」など抄書。

慶長一九 一六一四 * 「太平記抄」の著者世雄房日性没。

- 正保・明暦頃 一六四四～一六五七 「内典外典雜抄」成るか。
 慶安五 一六五二 七月、日辭、「平家物語太平記内歌集」を著す。
 寛文八 一六六八 九月、「太平記補闕」巻一まで書写。
 延宝元 一六七三 一〇月、「太平記補闕」後半一三枚書写。
 延宝七 一六七九 七月、「太平記抜書」（島津家本異文）書写。
 元禄元 一六八八 *二月、「太平記要覽」（岸友治）刊行。
 元禄四 一六九一 *二月、「参考太平記」刊行。
 享保七 一七二二 十一月、下田師古、「太平記綱要」を撰進。
 宝暦五 一七五五 三月、「太平記畑氏談」書写される。
 明和五 一七六八 この年から安永八年（一七七九）までに「武器考證」成る。
 天明四 一七八四 八月、村井古巖、「太平記抜萃」を林崎文庫に奉納。
 文化八 一八一二 徳大寺家本「太平記抜書」、この年七月以前に書写。
 明治一〇 一八七七 五月、深江仙助、「太平記抄書」を書写。
 明治四五 一九二二 「太平記畑氏談」識語。

所蔵者別索引（一部は依拠資料名）（数字は各資料に付した番号）

- あ 行
 愛媛大学附属図書館堀内文庫 33
 小浜市立図書館 3
- か 行
 金沢市立玉川図書館近世資料室蔵加越能文庫 49
 加美 宏 22
 旧浅野図書館 53
 九州大学附属図書館萩野文庫 32
 宮内庁書陵部 30 38
 国文学研究資料館・史料館 31
 国立公文書館内閣文庫 8 12 13 14 15 19 40
- さ 行
 静岡県立中央図書館莫文庫 7
 静岡県立中央図書館あすなろ県立図書館収蔵庫久能文庫 35 36
 島原図書館松平文庫 2 27 28
 神宮文庫 10 21
 聖来迎寺 39
 水府明徳会彰考館文庫 17 24 25 26 34
 素行文庫 52

■た 行	
高橋貞一	5
多和文庫	20
辻 善之助	18
天理大学附属天理図書館	9
東京大学史料編纂所	11
東西老舗大古書市	46
■な 行	
内藤くすり記念博物館	16
■は 行	
長谷川 端	4
弘前市立弘前図書館	43
武器考證	51
不如意文庫	50
蓬左文庫	1
■ま 行	
三原市立図書館	42
三宅久美子	23
物語古筆断簡集成	47
■や 行	
山口県文書館	45
陽明文庫	6

■わ 行

早稲田大学図書館 48

〔付記〕

資料の閲覧に際し、各地の図書館・文庫や個人在所蔵者の方々には多大の便宜を賜り、また先学同学の諸氏からも、資料の提供や所在情報などさまざまに御厚意に預りました。記して厚くお礼申し上げます。

[A Consideration on the Bibliography of the Transcript
Versions of *Taiheiki-Nukigaki* (II)]